

地域に生きる

佐藤キミ男

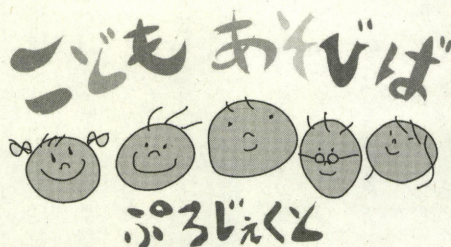
「障碍のある子どもたちが、日中、安心して過ごせる場所を！」と、平成十八年五月から活動が続けていた

「障がい児放課後クラブはすねっこ」（東京都板橋区蓮根における実践。以下、「はすねっこ」）を昨年（平成二十二年）三月、私は離れることになりました。これまで受託していた団体が運営上引き受けられなくなつてしまったというのがその直接的な理由です。

立ち上げからの四年間、本気で子どもたちとかかわり、子どもたちの生活を支えてくれたスタッフをはじめ、保護者、地域の方々、ボランティア、学生（実習生）

など、本当に多くの方々によって、「はすねっこ」は支えられてきました。

私自身、「はすねっこ」を離れることは本意ではありませんし、これまでの保育の形態の存続を強く望みました。そのために、福祉分野においても実績のある区内のNPO法人に新たに受託を依頼しプロポーザル（委託事業者決定のための審査）にかけたのですが、私たちの願いもむなしく、板橋区は別の法人を選択しました。どちらかというと「保育サービス」重視の団体でした。私にとっては、まさに青天の霹靂（きりぎりす）でしたが、



同時に、行政や受託団体と現場との「温度差」を調整できなかったことを反省もしました。

心残りには、「はすねっこ」での子どもたちの生活のことです。今までとは異なる生活の流れに、子どもたちはきつと戸惑うに違いはない。子どもや保護者が自由に選択できるように、新たな場をつくらなければ――。

区が別の団体を選んだことを知った直後、すぐにも新しい活動場所をつくって始動しようと思いました。しかし三月までは利用予約を受け付けていたので、このまま「はすねっこ」を離れるのは現実的でないことはわかっていました。実際、引き継ぎもかなり大変な作業でしたし、すぐに新しい活動に移ることは不可能でした。それでも、ほとんどのスタッフが「新し

い子どもたちの居場所づくり」に賛同し、協力してくれました。安定した場所の確保はまだまだ先の話だとしても、まずは、子どもたちが集まって、何とか数時間を過ごすことができる場所を探すことから始めよう。アイデアを出してくださる方が何人もいたことは、本当に幸せなことでした。適当な場所はないだろうかと案を巡らしている時、集会所を借りてみたらかどうかのアイデアをいただきました。

そして四月、「こどもあそびばプロジェクト」（以下、「あそびば」と称し、子どもたちとの新たな活動を再開したのです。

「借り暮らし」が始まった

新しい活動の場所は、十一階建て都営団地の一階にある公共の集会所です。「はすねっこ」からも程近い距離にあり、利用する子どもたちにはそれほど不便や戸惑いを感じさせないだろうと思い、この場所に決めました。

「あそびば」の活動は原則として月二回。活動時間は午前十時から午後四時までの六時間。弁当持参、参加費は千円です。参加費は、施設使用料と子どもたちやスタッフの飲み物やおやつで、ほとんど使い切つてしまいます。ですから、「あそびば」にかかわつてくれているスタッフは全員ボランティアです。利用してくれる子どもたちの家庭状況を考えると、参加費の金額はもっと下げられないかと、今も悩んでいます。

初めての「あそびば」の活動日、五人の子どもたちが参加してくれました。

最初に来た中学生のYは、少し緊張した表情を見せていましたが、スタッフと互いに顔を近づけ合うとニコッと笑って、「はすねっこ」で遊んだことを思い出してくれているようでした。

次に来た小学四年生のGは、ニコニコしながら、広い和室の畳の上に円を描くようにしばらく走つていましたが、舞台袖にある物置のような場所を見つけると、スタッフと一緒にその小さな空間に何枚もの座布団を

敷き詰め、その場を囲うようにござを立てて、自分の「棲み家」をつくりました。

高校生のAとMは、何でここに「はすねっこ」スタッフがいるのだろうと戸惑っている様子でしたが、すぐにスタッフを誘い、「はすねっこ」でも好きだったブロックで遊び始めたり、スタッフと一緒に音楽を聴いたり本を読んだりし始めました。

正午過ぎ、ちようどみんなが弁当を食べ終えたところに現れた中学一年生のSは、「今さっき起きたところなんです」と父親が話している傍らで、すでに好きな絵を描き始めていました。

子どもたちが変わらずに好きな遊びを楽しみ、自分のペースで過ごし始めてくれたことに安心しました。しかし同時に、「はすねっこ」のようにダイナミックな子どもたちの表現を充分に受け止めることができるのだろうかという不安もありました。

集会所は公共の施設ですから、私たち以外にも利用者がいます。他の利用者と共存できるよう、畳や障子、

置いてある備品などを傷つけたりしないよう、少しだけ気兼ねしながらの生活。昨夏公開されたメアリー・ノートン原作の映画「借り暮らしのアリエッティ」の小人たちの暮らしに少し重なる、まさに「借り暮らし」の活動が始まりました。

つながる想い

「借り暮らし」を始めた集会所には、Sさんという管理人がいます。下見のために集会所を訪れた時、とてもいいねいに案内してくださいました。Sさんの説明を受けながら、少しずつ活動のイメージができてきた私は、自分の内にある不安を話しました。

「元気のいい子どもたちなので、ほかに利用している方たちが気になることもあるかもしれないのですが……。」

Sさんはさらっと「お互いさまだから」と言うと、また次の場所の説明を続けました。Sさんのこの「お互いさま」という一言で、これからの活動を支えても

らえるように思い、この場所を選んでよかったと実感したのです。実際に活動が始まってからもSさんの様子は変わることなく、スタッフたちもSさんとの信頼関係の中で、子どもたちとダイナミックに遊ぶことができます。

また、「あそびば」のロゴをデザインしてくれたKさん、お茶の水女子大学こともプロジェクトの皆さん、院生のMさんとRさんほか、多くの方々がこの活動を応援し協力してくださいっています。

場の安定しない「借り暮らし」の活動ですが、人とのつながりが基盤となつて、少しずつ安定した子どもたちの居場所ができてきていることを感じています。



Tとの再会

二回目の「あそびば」の日、集会所から散歩に行く途中、私たちはばったりTに出会いました。小学三年生のTは、中学生の姉を含めた四、五人の子どもたちと一緒に遊んだ。この仲間できよく遊んでいるようでした。私たちの顔を見ると、びっくりしたように「先生たち、何でここにいるの？ どうしたらここに遊びに来られるの？」と聞いてきました。

Tも「はすねっこ」で出会った子です。Tには姉兄弟が四人いるのですが、四人全員が特別支援学校や特別支援学級に通っています。両親は健在ですが、生活が安定していません。母親はパチンコなどに興じてしまいうことが多く、子どもたちと日中かわることがほとんどないようでした。当然子どもたちの安定した居場所はなく、商店の品物を持ってきてしまうこともあるようで、心配した学校の担任のN先生が「はすねっこ」の利用を母親に勧めたのです。

「はすねっこ」でのTは、とても落ち着いていました。スタッフでも手間取っていたテレビとビデオレコーダーをいとも簡単に接続し、好きなDVDを再生しては楽しんで見るなど一人で上手にできます。スタッフの手を借りず、何でも一人でやろうとする。一見しっかりした「いい子」のようにも思えるのですが、Tと遊びながら、彼が誰のこともあてにせず育っていく姿をふと想像してしまい、心配になったことを思い出しました。

私たちと「あそびば」で再会した後も、姉や友達と過ごしながら、Tは集会所を時々見ていたようでした。そして五月の活動日に、再びTと出会いました。集会所の中の様子が気になり近寄ってきたTに「入ってくる？」とスタッフが声をかけましたが、首を横に振り、自分たちのグループに戻っていきました。本当はここで遊びたいのかもしれない、と彼の気持ちを感じながら後ろ姿を見送ったのですが、しばらくすると、Tは戻ってきて、「さとう先生！」と、窓の外から私に声

をかけました。そして黙って茶色の袋をぐつと私に差し出しました。中にはポテトが数本入っていました。「もらっていいの?」と聞くと、「うん」とうなずき、「ありがとう」と言葉を返す間もなく、Tはまた私たちのグループに戻っていきました。

子どもたちの居場所

子どもだけで行動しているTたちのグループを見ながら、ふと私は自分の子ども時代を思い出しました。

私は「がき大将」でした。昭和四十年代半ばのことです。近所の子どもたち五、六人を引き連れて、いつも近くの路地で遊んでいました。大人たちの目からちょっと離れた所で、子どもたちの世界を楽しんでいたような記憶が残っています。けれど、当時の子どもたちの世界は、大人たちの目から全く切り離された所にはありませんでした。身体はどこかで、子どもたちは大人のまなざしを感じながら遊んでいたような気がします。何かに守られているという安心感が子どもたちの遊び

を支え、豊かにしていたのではないのでしょうか。

Tたちのグループには今、どれくらいのものまなざしが注がれているのでしょうか。彼らは今、誰かに見守られているという感覚をどれくらい感じながら生きているのでしょうか。

子どもたちに向けられるまなざしは、「監視する目」であってはなりません。「大人」として、「地域住民」として、私たちがどのように子どもたちへまなざしを注いでいくのが、今問われているのだと思います。

Tたちにとって「あそびば」が生活の拠点の一つになるように考えていくことは、同時に、地域で暮らす子どもたちが安心して過ごすことができる居場所の一つとして「あそびば」が定着していくことにつながると私は考えています。

「少しばかりの気兼ね」や「お互いさまの気持ち」を含んだ「人とのつながり」を大切にしながら、これからも私たちは「あそびば」を続けていこうと思います。

(子どもあそびばプロジェクト代表)